



すべての肝炎患者が 安心して暮らせる社会をめざして

全国B型肝炎訴訟
全国原告団ニュース 2022(令和4)年8月 通算12号

第58回 日本肝臓学会総会

2022年
6月2日(木)・3日(金)

会場:パシフィコ横浜会議センター



今号の主な内容

- P.2 第58回日本肝臓学会総会
- P.3 「世界肝炎連盟(WHA)」について
- P.4 AMED 国立研究開発法人日本医療研究開発機構
- P.5 院内集会
- P.6 **世界の肝炎(新連載)**
「肝がんが世界で最も多いモンゴル国での支援活動」
江口 有一郎先生
医療法人口コメディカル ロコメディカル総合研究所 所長
- P.8 全国原告団交流集会告知
大人のラヂオ



第58回 日本肝臓学会総会

6月2日㈭～3日㈮ 会場/パシフィコ横浜

肝臓学会総会ーはじめての患者発表

肝臓学会は、日本で肝臓病の研究と診療に携わる医師・研究者が1965年に創立した学術団体です。不治の病といわれたウイルス肝炎の基礎研究と治療法の開発、医療現場での診療の最前線を担っている先生方の集団であり、私たち肝炎患者の生命と健康を守るために最も信頼できる大切なパートナーです。毎年開かれる総会では、全国から肝臓病の研究と診療にあたっている先生方が集まり、数多くのシンポジウム、講演、ワークショップなどが2日間にわたって開かれます。今年の総会に、私は患者として初めて登壇し、発表する場を与えていただきました。

本来は、学会の会員である医師・研究者のみが研究や臨床の成果を発表する場ですが、2020年の第56回総会(東京)から、医師以外の「メディカルスタッフ」(看護師・薬剤師・栄養士・検査技師などの医療スタッフや肝炎対策に関わる自治体職員など)の活動を発表する場が設けられました。私はこの総会に参加聴講し、肝炎患者のために奮闘するメディカルスタッフの姿に感銘を受けました。今回、私は患者の立場ですが、患者会や肝炎コーディネーターとしての活動を「メディカルスタッフ」の取組みの一環としてご報告させていただきました。

【1日目ー国際セッションについて】

総会1日目で特に際立っていた企画は、WHOのSDGs目標である「2030年肝炎エリミネーション(排除)」を踏まえた「国際セッション」です。広島大学の田中純子先生の司会で、米国、中国、台湾、韓国、オーストラリア、日本各国の研究者が、肝炎ウイルス検診やフォローアップ、HBワクチン推進と母子感染防止、核酸アナログ製剤の普及などによって肝炎患者とキャリアをどのよ

東京原告団代表 鈴木和彦



うに減らしてきたのか、そうした肝炎対策はどうすれば有効にすすめられるか、各国の実情に応じた取組みを報告されました。

また、「ウイルス肝炎撲滅アジア太平洋市民団体連合」の代表が、HIVについての国際的経験から、「患者の声や運動こそが社会を動かし、医療、研究、政策に影響を与えて感染症を克服する」と報告されました。さらに東京肝臓友の会の米澤敦子さんは、長年にわたる患者の電話相談の経験から、医療関係者にはわかりにくい偏見差別についての患者の思いについて語りました。

【2日目ーメディカルスタッフセッションでの患者発表】

2日目のメディカルスタッフセッションに、米澤さんと私が患者として登壇しました。冒頭、司会者から「伝統ある日本肝臓学会総会で、患者が登壇するのは初めてであり、記念すべき発表です」と紹介していただきました。

私たちの発表テーマは、「わが国の肝炎・肝がん対策における肝炎患者や患者会の役割～『肝炎医療コーディネーター』としての次世代の医療者への受講推進」でした。米澤さんは肝炎医療コーディネーターの養成講座やスキルアップ研修会における講義について、私は医学・看護・薬学・臨床検査などの医療系学生に患者の立場からの体験や感染者としての思いを伝える患者講義の経験を話しました。この活動により、現役医療従事者のコーディネーターとしてのスキルアップに有効であること、また将来医療従事者になる学生への講義が受講後のアンケートから患者に対する理解を深めるきっかけになっていることを紹介しました。緊張ましたが、ある著名な先生は「私も講義の中で肝炎コーディネーターの紹介をしますよ」とおっしゃってくださいました。

【医師と患者の協同ー今後に向けて】

今回、患者である私が発表の機会を得たのは、埼玉医大の持田智先生が学会規約を変えて医師以外のメディカルスタッフの総会発言の道を開いたことがきっかけです。また、前佐賀大学の江口有一郎先生は登壇に向けて私の背中を押してくださいました。総会会長の考藤先生には、患者の参加費を安価に設定していただくなどの配慮もしていただきました。

B肝原告団から会場で10名ほど、オンラインも含めて約50名の参加があり、後日オンデマンド配信もありました。

総会を通じて、私たち患者と医師・医療従事者との距離が一段と近くなったと感じています。ウイルス肝炎克服のために、こうした「人と人とのつながり」をいっそう大切にしていきたいと思います。



「世界肝炎連盟(WHA)」について

日本肝臓病患者団体協議会
米澤 敦子

世界肝炎連盟とは

WHA(World Hepatitis Alliance世界肝炎連盟)は、イギリスのチャールズ・ゴア氏を中心に2007年ごろにロンドンで発足しました。初代会長のゴア氏は世界肝炎デーの制定をWHO(世界保健機構)に求め、WHOは2010年に毎年7月28日を世界肝炎デーと決定しました。この日は、B型肝炎ウイルスを発見したノーベル受賞者のバルタク・サミュエル・ブランバーグ博士の誕生日です。

ゴア氏来日と世界・日本肝炎デー

ゴア氏は2011年に来日、厚労省肝炎対策推進室と面談され、その後日本肝炎デーが制定されました。来日の際には日肝協の事務所を訪れ幹事6名と面談、世界における日本の患者団体の役割についてお話をされました。翌2012年、日肝協は「第1回世界・日本肝炎デーフォーラム」を開催しました。ゴア氏は冒頭のスピーチで、「世界の肝炎患者がひとつになり、肝炎の根絶を目指していく」ことを訴えました。

WHAと日本の患者運動

現在、WHAでは2030年までに肝炎を排除(エリミネーション)するというWHOのSDGs目標に向け、約100カ国の300加盟団体が活動を続けています。現在、日本で加盟しているのは日肝協、ウイルス肝炎研究財団、はばたき福祉事業団、日本肝炎対策振興協会の4団体で、肝炎患者が主体となっているのは日肝協のみです。

第1回世界肝炎サミットへの参加

2015年、WHAは初めての世界肝炎サミットをスコットランドのグラスゴーで開催しました。私は日肝協代表として5日間のプログラムに参加、世界の患者団体と肝炎対策について意見交換を行い、日本の肝炎対策が世界的にもきわめて充実していることをあらためて実感しました。

世界の肝炎患者がひとつになるために

WHAとの関わりを通じて考えているのは、私たちが世界の肝炎患者の実態や患者団体の活動を知るとともに、肝炎対策の前進を求める私たち自身の運動の経験を世界に発信することの大切さです。それは、ゴア氏が10年前にスピーチした「世界の肝炎患者がひとつになる」ことを促進するでしょう。世界的感染症であるC型肝炎の根治薬をさらに普及し、B型肝炎ウイルス排除の創薬を目指すことは、世界中の肝炎患者が力をあわせてはじめて成し遂げられる課題だと思います。



第1回世界肝炎サミットの参加者

令和4年3月12日、「令和3年度肝炎等克服実用化研究事業公開報告会」が昨年に引き続きコロナ禍のためオンラインで開催されました。B型肝炎に関する演題が2題、C型肝炎に関する演題が2題、肝硬変に関する演題が1題、その他A型・E型肝炎に関する演題が1題の合計6演題が報告されました。

B型肝炎に関する演題の1番目は、ヒトの免疫を利用した治療法の研究の話題です。2番目は、ウイルスを解析し新たな創薬に資するための基礎研究の報告です。

1番目の免疫を利用した治療法は、肝細胞内にあるウイルスの鑄型となるcccDNAの排除だけでなく、肝細胞障害を伴わずに強力な抗ウイルス作用を発揮し、発がんを抑制することも目標にした研究です。

2番目の演題は、現在ある核酸アナログ製剤以外の創薬の標的を見つけるための基礎研究になります。核酸アナログ製剤とは異なる機序の創薬により、治療の選択肢が増え核酸アナログ製剤が使えない人にも使える薬が開発される可能性が出てきています。

基礎研究に関する演題は、内容が非常に専門的で難しく理解することは困難です。しかし基礎研究が進むことにより、その成果を応用しての創薬に結びつきますので非常に重要な報告となります。

1 ①肝炎公開報告会「B型肝炎の免疫は、善玉か悪玉か？」

中本 安成
29:32

日本医療研究開発機構公式チャンネル

2 ②肝炎公開報告会「B型肝炎ウイルスのポリメラーゼ蛋白の新規...

杉山 真也
31:13

日本医療研究開発機構公式チャンネル

5 ⑤肝炎公開報告会「肝硬変症に対する次世代治療の開発」

寺井 崇
28:51

日本医療研究開発機構公式チャンネル

また、肝硬変に関する演題は、肝硬変に対する治療法の開発についての報告でした。自己骨髄細胞の投与療法から始まり、脂肪組織由来の細胞を用いた再生治療に発展し、「エクソソーム」とよばれる細胞外小胞を用いた治療の開発へと治療法の開発が進んでいることが報告されました。

公開報告会の内容は、12月28日までYouTubeで公開されていますので、どのような先生方が研究しているのか、研究者を応援するためにも、ぜひご覧ください。



主催：AMED 国立研究開発法人 日本医療研究開発機構

後援：厚生労働省

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLs9G0NfKQc5vGvrGvXKlcCALaLpRVcgru>

大阪弁護団・中島康之



国立研究開発法人 日本医療研究開発機構
Japan Agency for Medical Research and Development

院内集会 5月31日水

肝炎対策の推進を求める国会内集会

3年ぶりに肝炎問題の院内集会が開かれました!

5月31日、肝炎対策の推進を求める国会内集会(院内集会)が開催されました。毎年、通常国会が開かれるこの時期には、日本肝臓病患者団体協議会(日肝協)が主催し、私たち全国B型肝炎訴訟原告団や薬害肝炎全国原告団も参加する院内集会が開催され、医療費助成の充実などの肝炎対策の推進を与野党の国会議員の先生方に要請していました。一昨年来のコロナ禍により、2年にわたり中止のやむなきに至っていましたが、今年は3年ぶりの開催となり、全国から集まった仲間の懐かしい顔に再開する機会となりました。

まだコロナ禍が完全には収束していないなかで、集会参加者は例年よりかなり少ない約80名でしたが、多くの国会議員の先生方が駆けつけてくださいました。院内集会にあわせて衆参両議院に提出する請願署名(肝がん・重度肝硬変治療研究事業の新制度の実態を調査し、肝がん・重度肝硬変患者をさらに幅広く救済するよう検討・対処を求める署名)は約3万筆が集まり、41名の先生に請願の紹介議員となっていました。

今年は残念ながら請願の採択には至りませんでしたが、昨年4月の制度改正で重症者助成制度の利用者は一定程度増加てきており、いっそう多くの患者さんが利用できる制度を目指して、国会議員の先生方の応援をいただきながら、私たち患者団体がいっそう運動をすすめていく必要性を確認した集会でした。

本協議会 院内集会



肝がんが世界で最も多いモンゴル国での支援活動

第1回 モンゴルと日本～肝炎対策のつながり～

医療法人ロコメディカル ロコメディカル総合研究所
江口 有一郎先生
(もと、佐賀大学医学部附属病院肝疾患センター 特任教授)



モンゴルとのご縁のはじまり

モンゴルの肝炎対策のお手伝いが始まったきっかけは、2016年、香月武先生（佐賀大学名誉教授 口腔外科）がモンゴルでの医療技術の指導に携わっていたとき、ある会議で「モンゴルでは肝炎が非常に多い」という話題となり、その場に居合わせた女性医師ムンク・ジャガール・アユサール先生（以降「ジャガー先生」）に「佐賀に肝炎撲滅の啓発をやっている男（私です）がいるぞ」と佐賀の肝炎啓発活動を紹介されたことです。ジャガー先生は「ぜひ協力してほしい」とその場で熱い依頼をされ、以後、インターネットのテレビ会議を通じてモンゴルの肝炎・肝がん対策の支援依頼を受けることになりました。



モンゴル馬にまたがる
もと馬術部の江口先生

モンゴルと高い肝炎罹患率

モンゴルは人口323万人、面積は日本の4倍で、首都ウランバートルの150万人以外はほとんどが遊牧民という「草原と砂漠の国」です。HBs抗原陽性率、HCV抗体陽性率がそれぞれ10%を超える結果的に肝がん有病率は世界1位で2位のエジプトの約3倍です。その原因は、かつての医療行為による水平感染とその後の垂直感染といわれています。私たちは、肝がん死亡率国内1位の佐賀で活動してきた経験から、「お役に立てることができるかもしれない」と佐賀大学の学長命を受け支援を開始しました。



2018年－最初のモンゴル訪問

2018年、最初のモンゴル訪問では、佐賀での教訓を生かして「地域の生の声をしっかり聞くこと」「なぜウイルス検査を受けたのか」「なぜ治療しようと思ったのか」の調査から始めました。

早朝から草原のがたがた道を走り、数時間に1軒の「ゲル（遊牧民のテント）」に突撃訪問したり、村の古びた木造の診療所で入院する患者さんたちへのヒアリングをしたりました。

その結果、やはり住民には肝炎についての知識がなく、保健師ですら水の衛生や子供の栄養指導で手いっぱい、「肝炎が怖い病気」とは知らないでいたことが明らかとなり、症状が出てきて、ようやく治療を始めることが、肝硬変や進行肝がんが減らない理由のひとつであると分かりました。

そこで私たちは、日本の肝炎医療コーディネーターの活動を紹介し、現地モンゴルでのコーディネーター養成に取り組むことになったのです。《次号に続く》



村の小さな診療所。入院も数名は可能です。
もちろん大草原の真ん中にポツンとあります。
柵があるのは、夜はオオカミが襲ってくることがあるから。泥棒や盗賊はいません。



村の診療所の病室



B型肝炎から肝硬変、大量腹水で
診療所に駆け込み入院していたおばあさん。
モンゴルのB型肝炎の多くは
D型（デルタ）肝炎のウイルスも
感染しているので、モンゴルでは治療法がなく、
若いひとでも肝硬変に早期に進行するため、
非常に困っています。

《次号は「第2回－日本からカミカゼが吹いた」です。お楽しみに!》

全国原告団交流集会予定

開催日:2022年12月4日(日)

拡がる未来、その先へ。

コンセプト

同じ経験を持った原告だから、互いの経験や悩みに共感できる。

自分の想いを吐露し、自らに向き合い、よりよい生活を送りましょう

プログラム予定

肝炎コーディネーターって何?

Zoom交流会、2023年開催案内、ほか

詳細は決まり次第、ご連絡いたします。

全国原告団交流集会 九州・東京実行委員会

「大人のラヂオ」を聴いてみませんか?

インターネットラジオの「ラジオNIKKEI 第1」で、『肝臓』をテーマにした「大人のラヂオ」という番組が、毎月第2週金曜 11時35分～12時30分(再放送 翌週月曜 21時30分～22時35分)に放送されています。



パーソナリティの米澤さんと
国立国際医療センター肝炎ウイルス情報センター(肝疾患研修室)
室長のは永匡先生。(2022年5月13日放送)

パーソナリティは日肝協の米澤敦子さんです。

これまでの出演者の多くは、八橋弘先生はじめ多くの肝臓専門医・研究者の先生方でした。

昨年からは、B肝・薬害の原告や患者さんが何人も出演しており、過去の番組を聴くこともできます。

『肝臓』について役に立つ医療情報だけでなく、医師・患者の生の声や人となり、「お気に入り曲」がわかる楽しい番組です。ぜひ、一度お聴きになってみてはいかが?

大人のラヂオ 検索

